

# 令和7年度 文部科学省 現職日本語教師研修プログラム普及事業 地域日本語教育コーディネーター研修報告

実施機関名	一般社団法人 多文化社会専門職機構
事業名	令和7年度現職日本語教師研修プログラム普及事業 「地域日本語教育コーディネーター研修」
事業実施期間	令和7年6月12日～令和8年3月13日
研修受講者数及び 研修修了者数	地域日本語教育コーディネーターコース受講者31名 中、研修修了者28名 地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のための 総括コーディネーターコース9名中、研修修了者9名 日本語教育プログラムデザインコース12名中、研修 修了者11名

# 研修報告の構成

## 1. 事業全体の概要

### 2. 各研修の概要① 地域日本語教育コーディネーターコース

2.1. 研修の目的、2.2. 「求められている資質、能力」についてと本研修における教育内容の関係、2.3. 実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制、2.4. 募集・選考方法、2.5. 受講者情報、2.6. 修了者、修了要件、2.7. 研修の様子、2.8. フォローアップ体制、2.9. 受講者からの評価

### 3. 各研修の概要② 地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のための総括コーディネーターコース

3.1. 研修の目的、3.2. 「求められている資質、能力」についてと本研修における教育内容の関係、3.3. 実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制、3.4. 募集・選考方法、3.5. 受講者情報、3.6. 修了者、修了要件、3.7. 研修の様子、3.8. フォローアップ体制、3.9. 受講者からの評価

## 研修報告の構成

### 4. 各研修の概要③ 日本語教育プログラムデザインコース

- 4.1. 研修の目的、4.2. 実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制、4.3. 募集・選考方法
- 4.4. 受講者情報、4.5. 修了者、修了要件、4.6. 受講者からの評価

### 5. 成果、課題

- 5.1. 各コースの成果、5.2. 受講者数及び修了者数の向上に対する取組

### 4. 評価、今後の展望

# 1. 事業全体の概要

## ■ 事業全体の概要

多文化社会専門職機構（TaSSK）は多文化社会の問題解決に寄与する専門人材を輩出することを目的に、多文化社会コーディネーター研修および認定プログラムを実施している。TaSSKがこれまでに実施してきたコーディネーター研究および認定プログラムでの知見を生かし、3コースの研修を実施する。

## ■ 研修の特徴

1. 育成する人物像： 地域日本語教育を多文化共生社会の実現に向けたシステムとして位置付け、多様な人や組織との連携・協働を推進してプログラムを運営できる人物で、かつ地域の現状に合った日本語教育プログラムを専門的視点をもって作成、実施し、評価できる能力を有する人物を育成する。
2. 教育理念： 必要な政策や制度、知識を基礎として学びつつ、地域日本語教育の多様なありようを踏まえ、知識・技能はもとより、受講者どうしの省察を軸とした相互学習を研修の軸に位置付けて展開する。

# 1. 事業全体の概要

## 地域日本語教育コーディネーター研修

### 地域日本語教育コーディネーターコース

自治体施策・国際交流協会事業・市民活動等の現場で、地域日本語教育コーディネーターとして地域日本語教室を運営することができる人材を育成する。

### 地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のためのコーディネーターコース

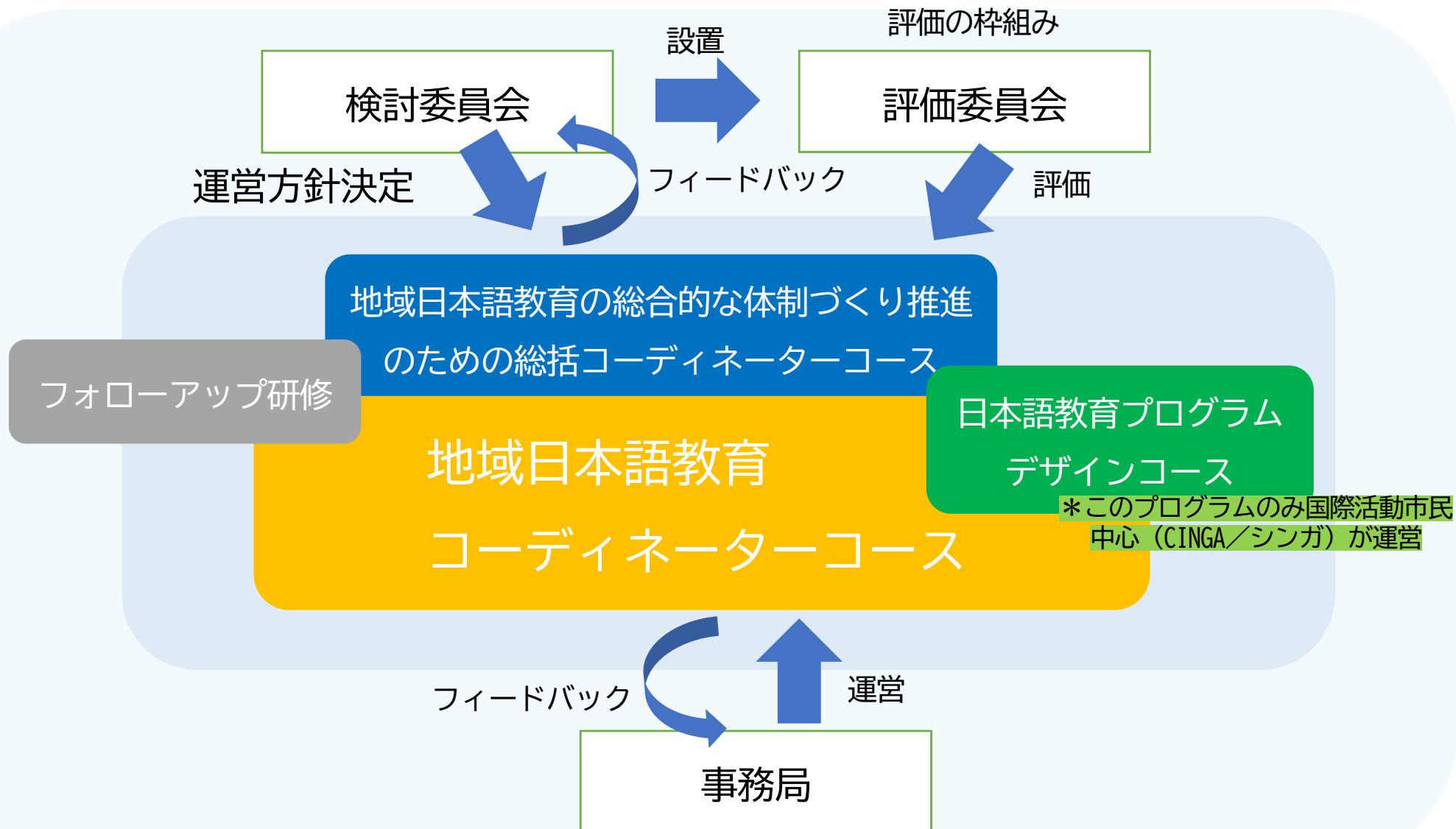
文部科学省「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」における総括コーディネーターを主な対象者として想定し、地域日本語教育の体制づくりを推進するとともに、地域日本語教育コーディネーターを育成するための力量形成を図る。

### 日本語教育プログラムデザインコース

文部科学省「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を実施している地方公共団体、国際交流協会等において日本語教育プログラムの編成・実施を担う地域日本語教育コーディネーター等を対象として、「日本語教育プログラムデザイン」に関する資質・能力について理解を深め、その向上を図る。

# 1. 事業全体の概要

## ■ 事業全体の事務体制



## 各研修の概要① 地域日本語教育コーディネーターコース

### ■ 2.1. 研修の目的

地方公共団体、国際交流協会、地域の日本語教室等で日本語教育プログラムの編成・実施及び日本語教育プログラムの実施に必要な地域の関係機関との連携・調整に携わっている人を対象に「地域日本語教育コーディネーター」に必要な資質・能力について理解を深め、その向上を図ることを目的とした研修を実施する。

### ■ 2.2. 「求められている資質、能力」についてと本研修における教育内容の関係

研修内容は、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』（文化審議会国語分科会）で示された「地域日本語教育コーディネーターに求められる資質・能力」、「教育内容」、「教育課程編成の目安」および『地域における日本語教育の在り方について（報告）』（文化庁）に沿って、検討委員会が検討した内容をもとに実施。

講義形式（オンデマンド）による知識伝達型の研修と、同期型研修の実践研究演習を組み合わせ、知識・技能・態度を総合的に向上させる。地域日本語教育のプログラムデザインおよび実施については、受講者各自の実践の振り返り（省察）を協働で行う。

## 2.3.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### ■ 内容

<p>夏期研修Ⅰ (講義) 【必修】</p>	<p>第1期 令和7(2025)年7月25日(金)～8月19日(火) 第2期 令和7(2025)年8月25日(月)～9月29日(月) オンデマンド講義動画</p>
<p>夏期研修Ⅱ (演習1) 【必修】</p>	<p>令和7(2025)年8月22日(金) 10:00-17:00</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 先進的な地域日本語教育コーディネーターによる実践事例を基に、グループ毎に課題設定等や計画についての分析を行う。</li> <li>・ 夏期研修Ⅰ・第1期の講義動画を受け、地域日本語教育におけるコーディネーターの役割、プログラムデザインを中心に議論を行う。</li> <li>・ 地域課題の解決に向けて地域日本語教育プログラムの策定を含めた実践活動計画の内容を再検討する。</li> </ul>
<p>秋期研修 (演習2) 【必修】</p>	<p>令和7(2025)年10月3日(金) 10:00-17:00</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 演習1(夏期研修Ⅱ)で設定した実践課題について中間報告を行い、ほかの受講者やファシリテーターからコメント・助言を受ける。</li> <li>・ 活動への取り組み方やコーディネーターの役割について再度見直しを行った上で、実践の継続及び冬期研修で発表を行うための準備をする。</li> <li>・ 対面実施の利点を活かし、受講者同士のネットワーキングを強化する。</li> </ul>
<p>フォローアップ研修 (講義・演習)</p>	<p>令和7(2025)年12月12日(金) 13:30-16:30</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域日本語教育に関する国の施策の方向性などについて理解を深める。</li> <li>・ 演習を通じて修了年度や地域を超えたネットワーキングを図る。</li> </ul>
<p>冬期研修 (演習3) 【必修】</p>	<p>令和8(2026)年2月6日(金) 10:00-17:00</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実践活動の成果を発表し、相互に学ぶ。</li> <li>・ 演習1(夏期研修Ⅱ)、実践活動、演習2(秋期研修)を通して学んだコーディネーターに必要な能力について理解を深める。</li> </ul>

## 2.3.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### ■ 内容

#### 夏期研修Ⅰ (オンデマンド 講義)

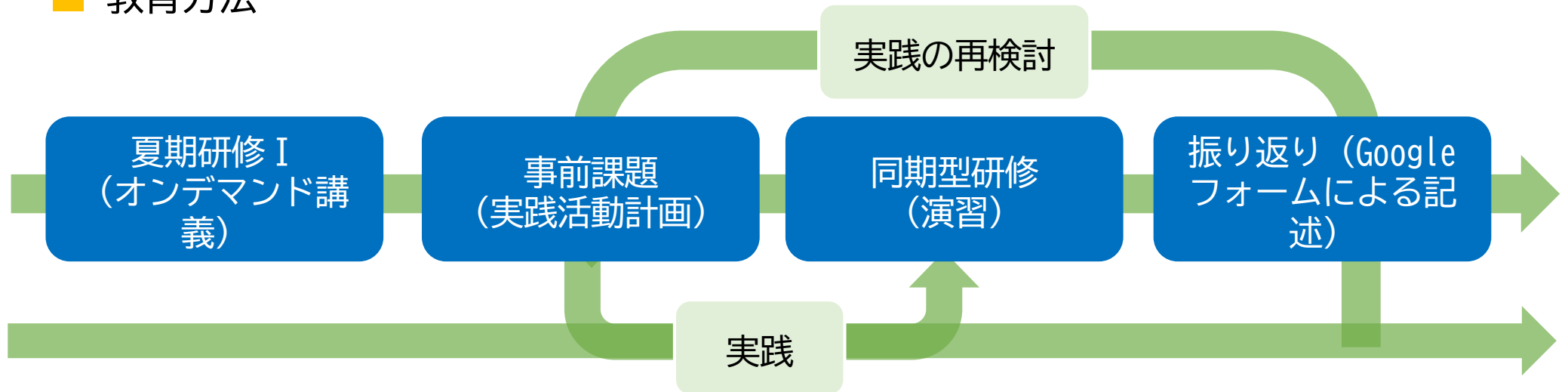
『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改定版』(文化審議会国語分科会)で示された「地域日本語教育コーディネーターに求められる資質・能力」、「教育内容」、「教育課程編成の目安」および『地域における日本語教育の在り方について(報告)』(文化庁)に沿って講義内容を決定。

夏期Ⅰ	第1期 令和7(2025)年7月25日(金)~8月19日(火) ※講義1~4、 第2期 令和7(2025)年8月25日(月)~9月29日(月) ※講義5~9
講義1	出入国管理施策及び多文化共生施策(2025年収録) 在留外国人施策・入国管理制度・教育行政と、外国人住民の国籍・在留資格等の把握する。 講師: 出入国在留管理庁
講義2 (旧・講義3)	地域日本語教育コーディネーターの役割(2023年収録) 地域日本語教育におけるネットワーキング、コミュニティーデザイン、ファシリテーションについて考察する。 講師: 菊池哲佳(多文化社会専門職機構・明星大学)
講義3 (旧・講義4)	地域日本語教育のプログラムデザイン①-教育目標・人・学習活動(2023年収録) プログラムにおいて何を指し、だれとどのような学習活動を行うのか、事例をとおして考察 講師: 萬浪絵理(多文化社会専門職機構・千葉市国際交流協会・国際活動市民中)
講義4 (旧・講義5)	地域日本語教育のプログラムデザイン②-生活Candoに基づく日本語教育プログラムデザイン(2023年収録) 生活Candoに基づく日本語教育プログラムデザインについて学ぶ 講師: 関崎友愛(日本語サービスYOU&I)
講義5 (旧・講義7)	地域日本語教育のプログラムデザイン③-プログラムの点検・評価・改善(2023年収録) 地域日本語教育プログラムの点検・評価・改善について考察する。 講師: 札野寛子(日本語まなびサポート北陸)
講義6 (旧・講義8)	日本語教育に関わる人材の育成①(2021年収録) 日本語教育人材の役割・専門性について整理する。また、日本語教育人材に対する企画・立案に必要な観点について学ぶ。 講師: 伊東祐郎(多文化社会専門職機構・国際教養大学専門職大学院)
講義7 (旧・講義9)	日本語教育に関わる人材の育成②(2023年収録) 日本語教育人材育成の取組みの視点と、地域日本語教育におけるコーディネーターの連携について学ぶ。 講師: 加藤早苗(インターカルト日本語教員養成研究所)・新居みどり(国際活動市民中)
講義8 (旧・講義10)	活動と広報①-情報公開・発信(2021年収録) 地域日本語教育活動における個人情報などの観点からの留意点、著作権に関する学ぶ。 講師: 我妻潤子(東京藝術大学非常勤講師・株式会社テイクオーバー知的財産アナリス)
講義9 (旧・講義11)	活動と広報②-地域日本語教育における広報(2021年収録) 地域日本語教育活動に必要な効果的な広報について学ぶ。 講師: 土井佳彦(多文化社会専門職機構・多文化共生リソースセンター東海)
講義10	夏期研修Ⅱ事前課題「実践活動計画」の策定(2025年収録)



## 2.3.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### ■ 教育方法



- 地域日本語教育の多様なありようを踏まえ、知識伝達型の研修を一部導入しつつも、受講者どうしの省察を軸とした相互学習を研修の中心とする。
- 受講者各自が「実践活動計画」を作成し、同期型研修と振り返りにおける気づきを実践に反映させていく。

### ■ 実施体制

6名の演習講師がファシリテーターとして伴走し、受講者への気づきを促す。

演習講師：有田玲子・伊東祐郎・鈴木ゆみ・高柳香代・土井佳彦・長尾晴香

## 2.4. 募集・選考方法

### ■ 選考

募集方法：TaSSK ホームページに募集要項、スケジュール等を掲載・案内し、募集を行った。

応募状況：応募者 37名、受講決定者 31名

（「対象者」の要件を満たさない方を受講不可とした）

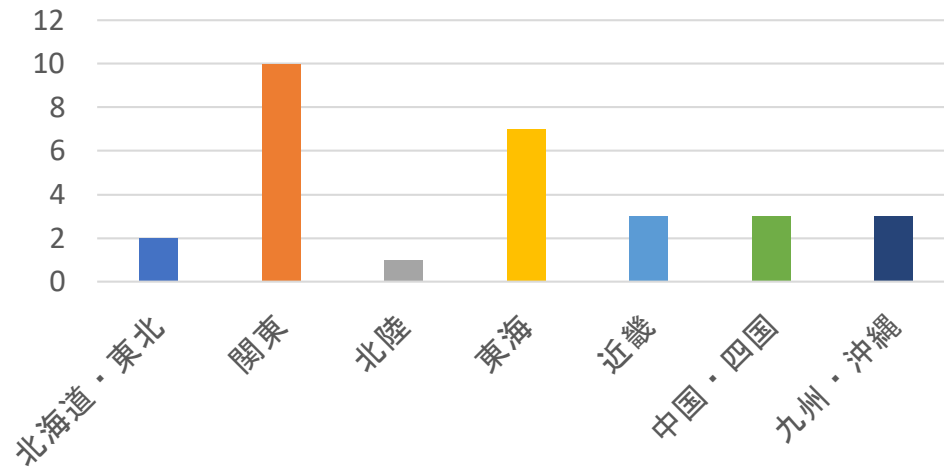
### ■ 対象者

次の全てに該当する人。地方公共団体（都道府県及び市区町村（教育委員会を含む））、国際交流協会、または社会福祉協議会の推薦を受けている人を優先。

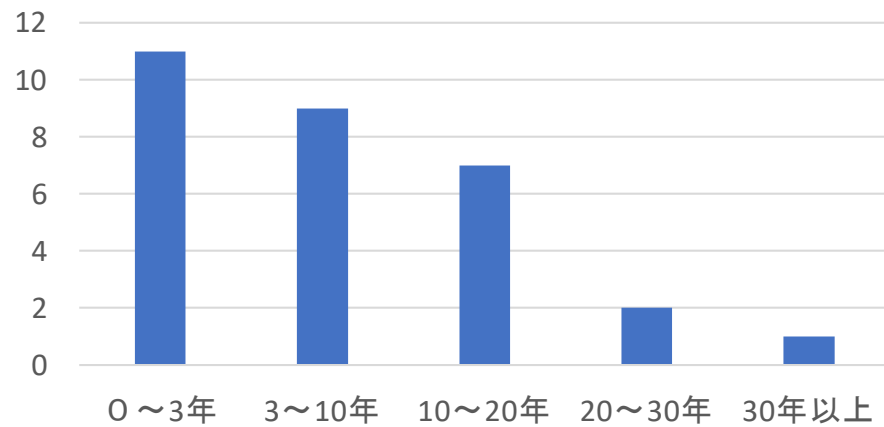
- 日本語教育に関する専門的な教育を受けていること。
- 地域日本語教育分野での経験を有すること（1年以上を目安とする）。
- 「4. 研修期間」で【必修】とする全ての日程を受講可能であること（フォローアップ研修を除く）。
- 地方公共団体・国際交流協会・大学、日本語教育機関、NPO法人等において日本語教育プログラムの編成及び実践に携わっていること。
- 地域日本語教育プログラムの実施に必要な地域の関係機関との調整に携わっていること。
- 研修への参加に当たっては、実践活動の場を有することを必須とし、本研修の実践活動について事前に代表者及び関係者の承諾を得られること。

## 2.5.受講者情報（受講者31名）

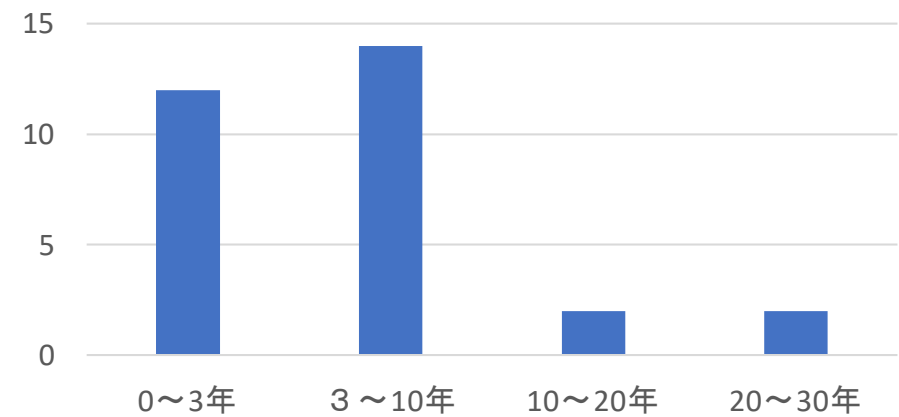
### ①実践地域（20都道府県）



### ②日本語教師としての経験年数



### ③地域日本語教育に関わる経験年数※



※日本語教師だけではなく、ボランティアや協会職員等の経験も含む

## 2.6.修了者、修了要件

### ■ 修了者

地域日本語教育コーディネーターコース 修了（予定）者28名（受講者31名、途中辞退者3名）

### ■ 修了要件

- (1) 【必修】夏期研修Ⅰの全ての講義動画視聴と、振り返りフォームの提出。
- (2) 【必修】夏期研修Ⅱ、秋期研修、冬期研修への8割以上の出席。
- (3) 実践活動計画、実践活動報告書等の研修で求める資料の提出。
- (4) 研修期間中に求める振り返りフォームの提出。



修了者には修了証を授与するとともに、修了者一覧を文部科学省および多文化社会専門職機構ウェブサイトに掲載

## 2.7.研修の様子

### ■ 夏期研修Ⅱ



- 本研修修了者による事例発表を聴講し、具体的なコーディネーター実践を学ぶ。
- 5,6名の小グループに分かれ、演習講師のファシリテートによるディスカッションを行う。
- 各受講者が「実践活動計画」を作成し、同期型研修と振り返りにおける気づきを実践に反映させていく。
- 夏期研修Ⅱ終了後に、演習講師より個別にコメントを送付。

## 2.7.研修の様子

### ■ 秋期研修



- 対面での演習を通じ、全国のコーディネーター同士、ネットワーキングを図る。
- 5, 6名の小グループに分かれ、演習講師のファシリテートによるディスカッションを行う。
- 各受講者が「実践活動計画」を作成し、同期型研修と振り返りにおける気づきを実践に反映させていく。

### ■ 冬期研修



- 各受講者が半年間にわたる実践とその振り返りを発表し、参加者同士話し合いをしながら省察を深めた。
- 研修最後には5, 6名の小グループで振り返りを行い、研修を通じての気づきや今後の課題・展望等についてディスカッションを行った。

## 2.8.フォローアップ体制

### ■ 研修前後のフォロー体制（受講者対象）

#### ・個別サポート

受講者が作成した「実践活動計画」について、演習講師が個別にコメント。

#### ・メーリングリスト

地域日本語教育に関する情報提供、受講者同士の情報・意見交換の場として、メーリングリストを作成・管理。

#### ・「TaSSKにほんごカフェ」（オンライン、任意参加）

「地域日本語教育コーディネーターコース」・「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のためのコーディネーターコース」受講者を対象に、地域日本語教育に関する情報・意見交換の場として、ネットワーキングの機会として2回実施。

#### ・冬期研修での発表を受講者に限定公開

「地域日本語教育コーディネーターコース」と「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のためのコーディネーターコース」の各研修受講者内で、発表・質疑応答を限定公開した。

## 2.8.フォローアップ体制

### ■ 研修前後のフォロー体制（受講者・修了者対象）

#### ・メーリングリスト

2021年度からの修了者約300名が登録する、地域日本語教育に関する情報交換・ネットワークづくりの場。

#### ・フォローアップ研修（双方向、ハイブリッド実施）

2026年12月12日（金）13:30～16:30 受講者58名（オンライン参加52名、会場参加6名）

報告1「台湾半導体メーカーTSMCを受け入れた熊本のいま」

講師：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団事務局長 勝谷知美氏

報告2「玉東町における国際協力NGOと地方自治体の連携によるウクライナ避難民受け入れ-なぜ玉東町の避難民は日本語を

学び主体的な生活ができたのか？全体支援の文脈から考える」

講師：一般社団法人G0J0plus 工藤絢花氏/本田佳織氏

演習「参加者同士による自由セッション」

受講者からの評価 ※一部抜粋

（報告1について）「特定の国の大きな企業が地方県に誘致されるとどのようなことが起きるのがわかり、参考になりました。このところ各県が海外の機関とMOUを結ぶ動きが活発になっており、規模は異なるものの、このようなことが起こってくるのではないかと思います。県の施策による影響を見越して地域日本語教育の備えをすることがますます必要になると思いました。」

（報告2について）「日本語教育が「自立の鍵」として機能しているという点が印象的でした。（中略）避難民支援が多文化共生事業につながった点もすばらしいと感じました。お2人の他者を巻き込んで進んでいく力に魅了されました！」



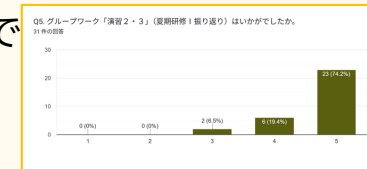
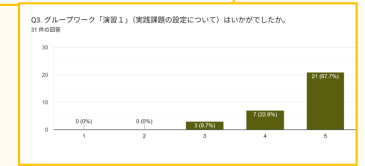
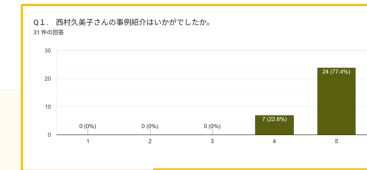
## 2.9.受講者からの評価

### ■研修での気づき（各研修後の「振り返り」より抜粋）

#### 夏期研修Ⅱ（オンライン実施）

「なんとなくぼんやりとしていた自分の教育目標や自分の立ち位置と役割について、まず人に発表したおかげで、俯瞰的に見ることができました。」

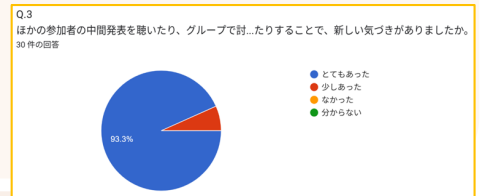
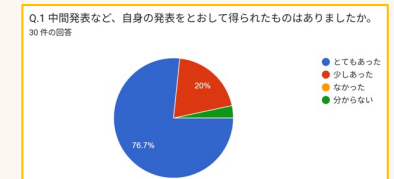
「皆さまの事例やお話をお聞きして、奮闘しているのは自分だけではないと勇気づけられました。ご相談できる方々がいる、ご相談できる場があるおかげで、前向きに課題に取り組んでいけそうです。」



#### 秋期研修（対面実施）

「課題の設定の甘さについてご指摘いただき、改めて自分が現状に対して何が問題だと認識しているのか、そしてどう変えていきたいのかについて言語化できたのが最大の収穫でした。」

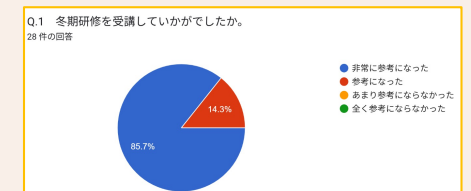
「発表を通じた課題のシェアや今後の考察だけでなく、オンラインでは得られないリアルならではのネットワーキング活動もできたこともうれしく思いました。」



#### 冬期研修（オンライン実施）

「様々な地域の実践を知ることができ、現在活動を行っている地域の現状を俯瞰して捉えることができました。自身の活動を振り返り、他地域の取り組みを知ることによって、これから取り組むべきことが明確になったように思います。」

「敢えて自分とは違う立場の方の発表を拝見しました。自分の実践では決して見ることのない状況や視点についてのお話を聞くことができ、大変な刺激になり有意義な研修になりました。」



## 2.9.受講者からの評価

### ■ 研修全体の評価（冬期研修終了時の「振り返り」より抜粋）

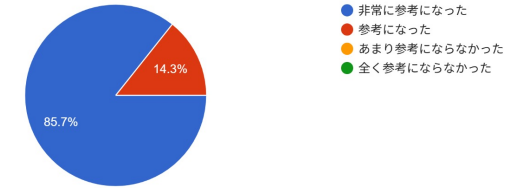
「日本語教育、多文化共生についての知識、情報がないまま手探りで日本語教室を立ち上げたが、他地域の取り組みを聞くことで、足りなかった部分、なぜ上手くいかなかったかが見えてきた。」

「コーディネーターとして必要な知識等が身に付いたことはもちろんのこと、研修を通じて様々な地域の先生方やコーディネーターの方とお会いでき、横のつながりができたことが大変ありがたかったです。コーディネーター1年目ということもあり、研修前までは孤軍奮闘しているような気持でしたが、研修を通じて私の実践地域の取組や、私自身がコーディネーターとして取り組んでいることに、良い面にも目を向けてくださったのは心理的にも助けになりました。」

「「地域日本語教育コーディネーター研修」の運営体制を通して、単に「教える」のではなく、「伴走する」「伴走支援」といった地域日本語教育コーディネーターの役割を改めて感じる事ができました。評価するのではなく、一緒に考え、支え合ってくくださった受講者の皆さんや、ファシリテーター、運営事務局の皆様我心から感謝いたします。」

「（対面研修の時間を増やすことができれば）自身の事業内容の検討にとどまらず、「コーディネーターとは何か」「日本語教育の役割とは何か」「多文化共生社会をどのように描くか」といった、より俯瞰的・本質的なテーマについても議論できたのではないかと思います。自らの事業から一度視野を広げ、全体像を捉え直す機会があることで、日々の実践に還元できる示唆もより明確になるのではないかと感じました。」

Q.3 地域日本語教育コーディネーターコース（研修全体）を受講していかがでしたか。  
28件の回答



## 各研修の概要②

# 地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のための総括コーディネーターコース

### 3.1. 研修の目的

文化庁「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」における総括コーディネーターを主な対象者として想定し、地域日本語教育システムの構築、「地域日本語教育コーディネーター」※1 育成などの取組みを通じて、多文化共生社会の形成に寄与する人材（「総合的な体制づくり推進のためのコーディネーター」）の育成を目的とし、研修を実施する※2。

※1 「地域日本語教育コーディネーター」とは、地方公共団体、国際交流協会、地域の日本語教室等で日本語教育プログラムの編成・実施、及び日本語教育プログラムの実施に必要な地域の関係機関との連携・調整に携わる日本語教育人材をいう。

※2 本研修では、「総合的な体制づくり推進のためのコーディネーター」を、多文化共生社会の形成に向けて、市民や関係機関・団体と連携・協働しながら地域日本語教育システムの構築を図るとともに、地域日本語教育コーディネーターの育成等を通じて、地域日本語教育の総合的な体制づくりを推進する人と位置付けている。

### 3.2. 「求められている資質、能力」についてと本研修における教育内容の関係の関係

研修内容は、『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』（文化審議会国語分科会）で示された「地域日本語教育コーディネーターに求められる資質・能力」、「教育内容」、「教育課程編成の目安」および『地域における日本語教育の在り方について（報告）』（文化庁）に沿って、検討委員会が検討した内容をもとに実施。

講義形式（オンデマンド）による知識伝達型の研修と、同期型研修の実践研究演習を組み合わせ、知識・技能・態度を総合的に向上させる。地域日本語教育のプログラムデザインおよび実施については、受講者各自の実践の振り返り（省察）を協働で行う。

## 3.3.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### 3.3.実施スケジュール

夏期研修 I 【必修】	期間： 内容：	第1期 令和7（2025）年7月25日（金）～8月19日（火） 第2期 令和7（2025）年8月25日（月）～9月29日（月） オンデマンド配信による講義動画の視聴
夏期研修 II 【必修】	期間： 場所：	令和7（2025）年8月26日（火）10:00-17:00 オンライン（ビデオ会議システムを利用）
実践モニタリング	令和7（2025）年9月～令和8（2026）年1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伴走型支援・助言の一環として、受講者、協働実践研究者、関係者で、モニタリング（現状分析、省察）を行う。</li> <li>・ モニタリングを通じ、受講者はコーディネーターとして課題解決に取り組むとともに、コーディネーターとしての専門的力量形成を図る。</li> </ul>
秋期研修 【必修】	期間： 場所：	令和7（2025）年10月15日（水）10:00-17:00 Global Village有楽町ハウス（東京都千代田区有楽町）
フォローアップ研修	期間： 場所：	令和7（2025）年12月12日（金）13:30-16:30 ハイブリッド：宮崎県婦人会館（宮崎県宮崎市旭）及びオンライン（ビデオ会議システム利用）
冬期研修 【必修】	期間： 場所：	令和8（2026）年2月3日（火）10:00-17:00 オンライン（ビデオ会議システムを利用）

## 3.3.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### 3.3. 内容、教育方法

参加者、協働実践研究者が協働で実践の振り返り（省察）を行うこととする。協働での振り返りを通じて、参加者が各地域の実践現場で地域日本語教育コーディネーターを育成するためのカスケード研修（省察の場づくり）を担うことができる力量形成を図る。

コースカリキュラムは、夏期研修Ⅰ、夏期研修Ⅱ、秋期研修、冬期研修、モニタリングで構成される。夏期研修Ⅰは、オンデマンドの動画配信視聴により、知識伝達型の研修を行う。

- ①多文化共生施策における地域日本語教育
- ②地域日本語教育の体制整備に向けたコーディネーターの役割
- ③日本語教育に関わる人材の育成
- ④地域日本語教育活動における情報の管理

夏期研修Ⅱ、秋期研修、冬期研修は、参加者と協働実践研究者による実践研究を行う。参加者が、本研修と同等の研修を実施する際に企画・運営者及び講師として求められる、地域日本語教育のコーディネートに対する助言・指導の能力を育成する。手法としては、協働実践研究の形をとり、本研修参加者が課題設定を行い、地域日本語教育コーディネーター研修受講者を育成する上で前提となる参加者自身のコーディネート能力を見直し、さらに育成することとする。

モニタリングは、夏期研修Ⅱ以降に随時実施する。モニタリングでは伴走型支援・助言の一環として、協働実践研究者が参加者および実践現場の関係者とオンライン上でモニタリング（現状分析、省察）を行う。これを通じ、参加者自身のコーディネート能力をブラッシュアップするとともに、助言指導の前提となる参加者自身のコーディネート能力を向上させる。

## 3.3.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### 3.3. 内容、教育方法

夏期研修Ⅱ	令和7（2025）年8月26日（火）10:00-17:00 <ul style="list-style-type: none"> <li>・受講者と協働実践研究者による協働実践研究を行う。受講者はそれぞれの現場での課題解決に必要なコーディネーターとしての実践の視点を考察する。</li> </ul>
実践モニタリング	令和7（2025）年9月～令和8（2026）年1月 <ul style="list-style-type: none"> <li>・伴走型支援・助言の一環として、受講者、協働実践研究者、関係者で、モニタリング（現状分析、省察）を行う。</li> <li>・モニタリングを通じ、受講者はコーディネーターとして課題解決に取り組むとともに、コーディネーターとしての専門的力量的形成を図る。</li> </ul>
フォローアップ研修	令和7（2025）年12月12日（金）13:30-16:30
講義・演習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域日本語教育に関する国の施策の方向性などについて理解を深める。</li> <li>・演習を通じて修了年度や地域を超えたネットワーキングを図る。</li> </ul>
秋期研修	令和7（2025）年10月15日（水）10:00-17:00 <ul style="list-style-type: none"> <li>・演習1（夏期）で設定した実践課題について中間報告を行う。</li> </ul>
冬期研修	令和8（2026）年2月3日（火）10:00-17:00

### 3.3. 実施体制

下記の協働実践研究者と受講者が実践研究課題について考察することを通じて、総括コーディネーターとしての力量形成を図る。

菊池哲佳（多文化社会専門職機構・明星大学）、小山紳一郎（多文化社会専門職機構・SIDラボ）、鈴木ゆみ（磐田国際交流協会、静岡県国際交流協会）、土井佳彦（多文化社会専門職機構、多文化共生リソースセンター東海）、山西優二（多文化社会専門職機構・早稲田大学名誉教授）、犬飼康弘（ひろしま国際センター）、新矢麻紀子（大阪産業大学）、仙田武司（しまね国際センター）

## 3.4.募集・選考方法

対象者：次の全てに該当し、地方公共団体（都道府県及び政令指定都市（教育委員会を含む））、地域国際化協会※3が推薦する人。

- (1) 本研修の参加及び研修受講中の取組内容に対し、所属団体や事業関係者の協力を得られること。
- (2) 文部科学省「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」において総括コーディネーター※4を務めている（または今後就任予定）、あるいは都道府県または政令指定都市による域内複数個所における日本語教育事業の運営において中心的な業務を担っている（または今後担当予定）こと。
- (3) 研修終了後、都道府県または政令指定都市による事業の一環で、地域日本語教育コーディネーターの育成について、OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）等を通じて実施できるようになることが見込まれること。
- (4) 「4. 研修期間」で【必修】とする全ての日程を受講可能であること（フォローアップ研修を除く）。
- (5) 研修への参加に当たっては、総括コーディネーターを想定した実践活動の場を有することを必須とし、本研修の実践活動について事前に代表者及び関係者の承諾を得られること。

※3 ここで言う「地域国際化協会」とは、総務省の指針に基づき県等が作成した「地域国際交流推進大綱」に位置づけられた、地域の国際交流を推進するにふさわしい中核的民間国際交流組織を言う。

※4 「総括コーディネーター」は、地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業において地域日本語教育コーディネーターと連絡を取りながら、域内全体の司令塔の役割を担う。具体的には、推進計画の策定や見直し、その実施状況の把握、他の行政分野や関係者との調整、各地域への指導・助言などの役割を想定する。

定員：8名（本研修の目的等を考慮の上、選考を行う。）

## 3.5.受講者情報、3.6.修了者、修了要件

### 3.5. 受講者情報

所属団体：地域国際化協会6名、自治体1名、その他2名

実践地域：北海道・東北1名、関東2名、東海・北陸2名、近畿1名、中国・四国2名、九州1名

### 3.6. 修了者、修了要件

修了者：9名（受講者9名）

修了要件

- ①本研修で必修と定める研修への8割以上の出席。
- ②実践活動計画、実践活動報告書等の研修で求める資料の提出。
- ③研修期間中に求める振り返りフォームの提出。

修了者には修了証を授与するとともに、修了者一覧を文化庁およびTaSSKウェブサイトに掲載する。



修了者には修了証を授与するとともに、修了者一覧を文部科学省および多文化社会専門職機構ウェブサイトに掲載

## 3.7.研修の様子、3.8.フォローアップ体制

### ■ 3.7. 研修の様子（秋期研修）



### ■ 3.8. フォローアップ体制

スライド17を参照のこと

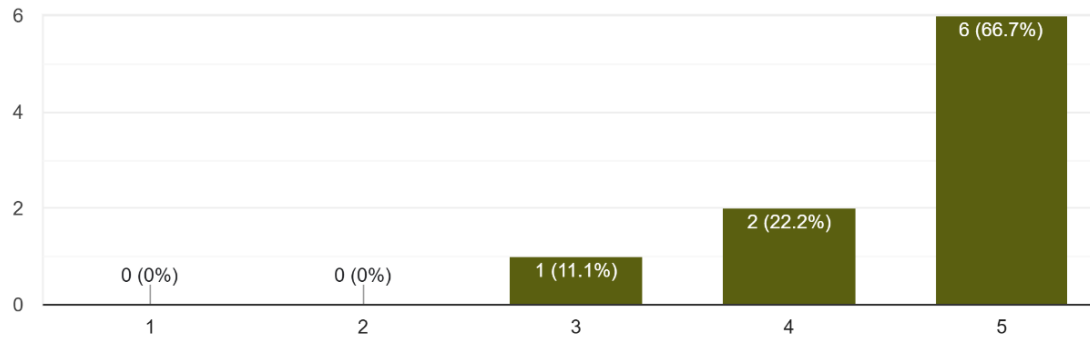
## 3.9. 受講者からの評価

### 夏期研修Ⅱ振り返り

（「全く参考にならなかった」を1、「非常に参考になった」を5として評価）

グループワーク（課題作文「コーディネーターとし...」に基づく発表、質疑応答）はいかがでしたか。

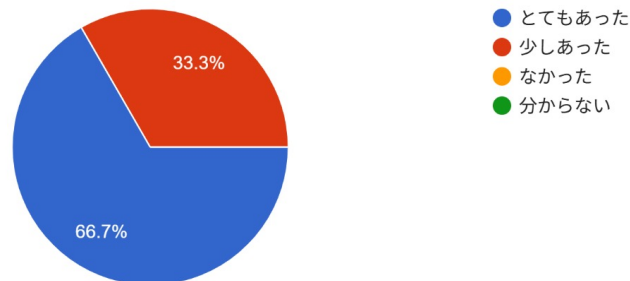
9件の回答



### 秋期研修振り返り

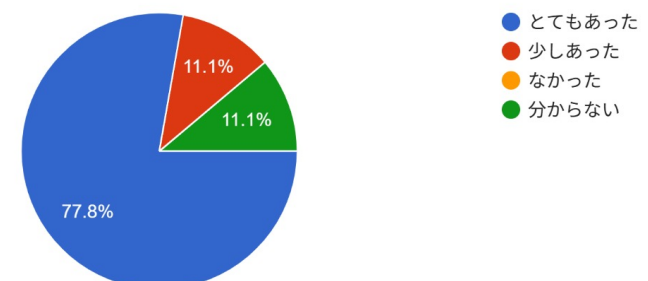
ご自身の「実践研究レポート(案)」発表について、得られたものはありましたか。

9件の回答



他の参加者の「実践研究レポート(案)」発表を聴いて、得られたものはありましたか。

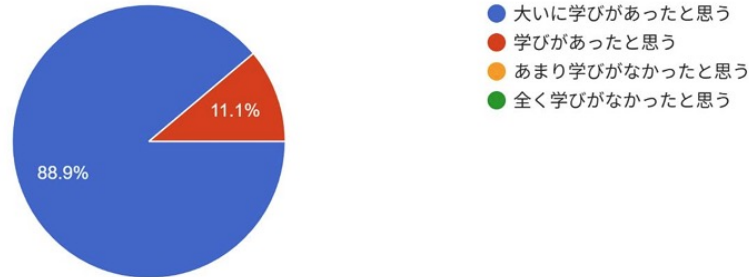
9件の回答



## 3.9. 受講者からの評価

### 冬期研修振り返り

Q.1 冬期研修において、学びや気づきがありましたか。  
9件の回答



#### 上記回答の理由

- 「他の地域の取り組みや課題について、共有できた。自分の取り組みについて振り返る時間が持てた」
- 「他団体の取り組みを知ることができた、自身の取り組みについて客観的で建設的な意見をいただけた」
- 「地域の課題を再度考えながら、今年度行った取り組みについて客観的に振り返ったことで、その意義と課題をより深く認識できた」
- 「他地域での実践について、実践者本人からの報告や課題にどのように向き合っているのかを聞く機会がとても貴重であったため」
- 「時間に流されて終わってしまいそうになる中、地域日本語教育と向き合って、言葉にして、みなさんの意見からも自分の考えを整理できる時間できた」
- 「地域によって乗り越えなければいけない壁は違いますが、全国の総括CDの皆さんの取組を知り、参考にしたいことがたくさんありました」
- 「これまでの振り返りとして、全体を俯瞰してみることができました。第三者からの知見を的確にいただけることは大変貴重でした。」
- 「みなさまからのコメントをいただき、レポート作成にあたっての方向性が見えてきました」
- 「今回みなさんの発表を聞いて、総括が考えるべきことや、総括だからできることが少しわかったような気がします」

## 各研修の概要③ 日本語教育プログラムデザインコース

### ■ 4.1. 研修の目的

「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を実施している地方公共団体、国際交流協会等において日本語教育プログラムの編成・実施を担う地域日本語教育コーディネーター等を対象として、「日本語教育プログラムデザイン」に関する資質・能力について理解を深め、その向上を図ること

### ■ 「求められている資質、能力」についてと本研修における教育内容の関係

「地域日本語教育コーディネーターに求められる資質・能力」のうち、特に日本語教育プログラムデザインに関する項目の向上に焦点化した。

技能（2）「（中略）適切な日本語教育プログラムをデザインできる」

技能（3）「日本語教育プログラムの策定・実施・点検・改善の管理ができる」

→これらの技能の向上に必要な「知識」や「視点」の涵養が図れるよう、本研修の教育内容に盛り込んだ。

技能（5）地方公共団体を始めとする地域の関係機関・団体・関係者と連携・協力体制を構築することができる。

態度（1）「（中略）自らの立場と役割を認識し、自らに必要となる知識・能力を獲得しようとするなど、常に学び続けようとする」

→自地域の体制づくり事業において協働する人とともに研修に参加してもらうことにより、役割の違いを理解しながら、また、他地域参加者から事例や情報を得ながら、自地域の日本語教育プログラムについて対話や演習をとおして主体的に考えようとする態度を涵養する教育内容とした。

## 4.2.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### ■ 実施スケジュール、内容

研修Ⅰ オンライン集合研修	期間： 内容：	令和7（2025）年8月29日（金）～11月28日（金）全9回 日本語教育プログラムデザインについてさまざまな観点から学び、自地域における日本語教育プログラムの策定や改善について検討した。（プログラム詳細は次頁）
研修Ⅱ モニタリング	期間： 内容：	令和8年1月（1地域1時間） 研修Ⅰでの学びを踏まえた日本語教育プログラムの策定や改善について、地域別に省察を行った。
研修Ⅲ ラウンドテーブル	期間： 内容：	令和8年2月7日（土） 各地域の地域日本語教育コーディネーターが研修ⅠとⅡを踏まえて自地域の日本語教育プログラム策定や改善について発表し、参加者との対話をとおして省察を深めた。

※すべての研修はオンラインにて実施した（ビデオ会議システムを利用）

## 4.2.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### ■ 研修I 内容

『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』（文化審議会国語分科会）で示された「地域日本語教育コーディネーターに求められる資質・能力」、「教育内容」、「教育課程編成の目安」および『地域における日本語教育の在り方について（報告）』（文化庁）に沿って、日本語教育プログラムデザインについて学ぶための構成とした。

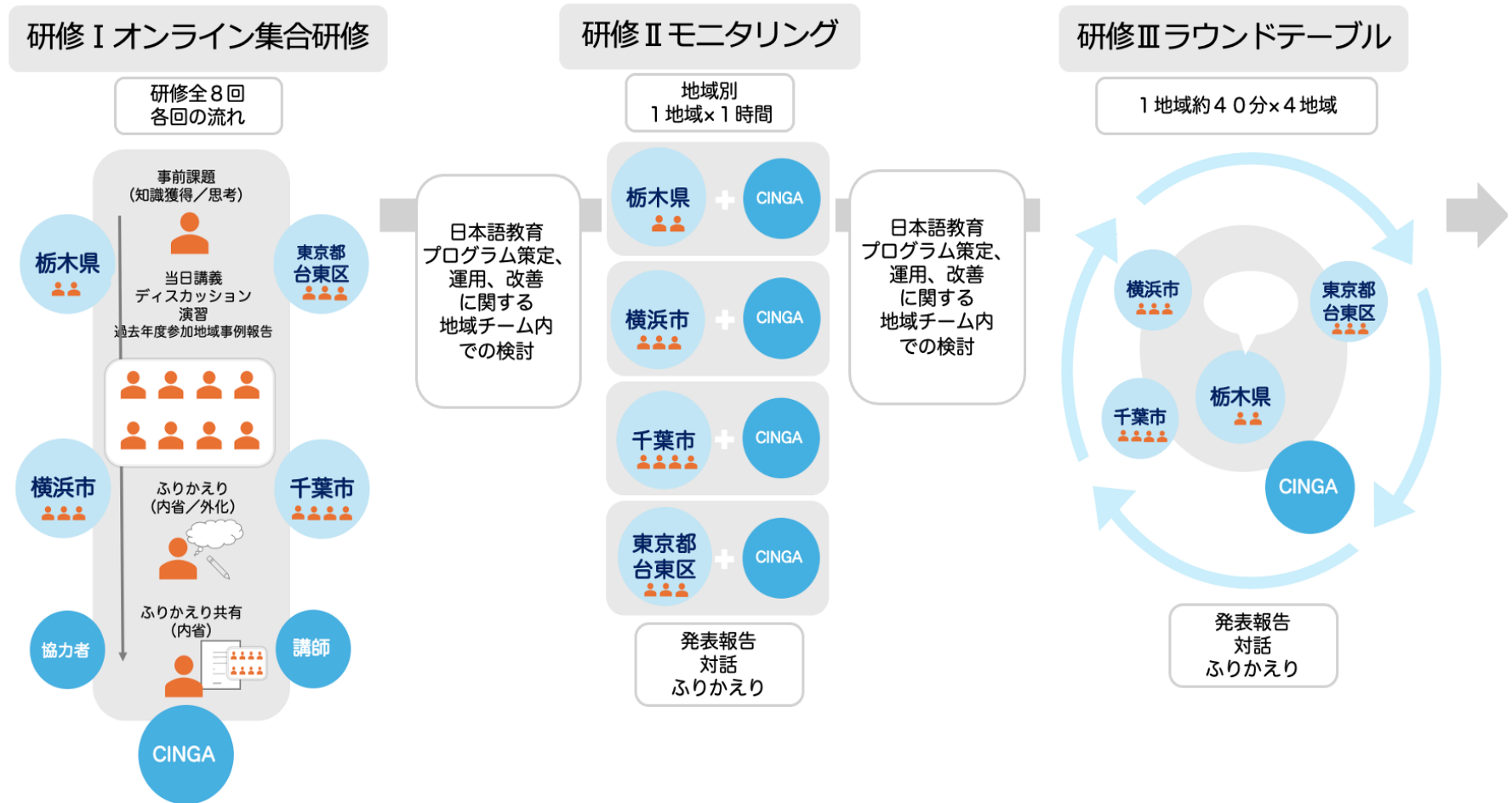


研修I 第4回

	日時	内容	講師
1	8/29 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×各地の実践</b> 現在、各地で行われている生活者のための基礎的な日本語教育プログラムを知る。また、研修参加者の実践現場における日本語教育やその背景、課題を共有し、ありようについて考える。	CINGA 萬浪 絵理
2	9/5 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×社会・自治体の展望</b> 地日本語教育をめぐる国の施策や日本語教育の方向性、地域事例を学ぶ。マクロ・メゾ・ミクロの視点で各参加者が自地域の実践を見直し、地域の日本語教育を捉え直す。	武蔵野大学 神吉 宇一
3	9/19 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×言語教育の目的と実践</b> 学習・教授・評価の枠組である「日本語教育の参照枠」を地域においてどう捉え、どう活用するか。多文化共生のまちづくりを目指す中で、言語教育観の3つの柱や「生活 Can do」をどう捉えるかを考える。	YYJ・ゆるくてやさしい日本語のなかまたち 奥村 三菜子
4	9/26 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×目標設定と実践の評価</b> 地域全体のプログラムデザインや1本のコースデザインにおいて欠かせない目標設定、評価、改善についての基本的な考え方を学び、何のために何をどのように「評価」するかを考える。	東京大学大学院 宇佐美 洋
5	10/17 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×自己表現活動</b> 「自己表現活動中心の基礎日本語教育」について知り、「対話型活動」について再考する。「生活者」のための日本語教育において言語習得促進のためにすべきことについて話し合う。	広島大学 森戸国際高等教育学院 西口 光一
6	10/24 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×第二言語習得研究</b> 第二言語習得研究の結果を踏まえ、自身の地域での教室活動をふりかえる。現在の実践が日本語学習を促進するものとなっているか、学習を促進するために何ができるかを考える。	CINGA 西山 陽子
7	11/7 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×学習支援者との協働</b> 事例をとし、地域日本語教育の体制と地域日本語教室における教師と学習支援者との関わりを知る。それをもとに、地域の日本語学習活動の場に関わる人々の協働を考える。	トヤマ・ヤポニカ 中河 和子
8	11/14 (金) 19:30-20:30	<b>地域日本語教育×今後の実践①</b> 研修第1回から第7回までの学びを踏まえて、地域ごとに今後の理想像を描く。	CINGA 西山 陽子
9	11/28 (金) 19:30-21:30	<b>地域日本語教育×今後の実践②</b> 研修I全体を通して生じた疑問や個々の実践課題を持ち寄って議論する。研修全体をふりかえり、今後の実践につなげる。	CINGA 萬浪 絵理

## 4.2.実施スケジュール、内容、教育方法、実施体制

### ■ 教育方法



### ■ 実施体制

研修コーディネーター2名が研修全体のカリキュラムの策定と運営、研修当日のファシリテーターを担い、コース全体をとおして受講者に伴走した。サブコーディネーター1名は研修Iのカリキュラム策定支援、協力者との連絡調整を行い、他1名は当日の実施支援を行なった。

各回講師のほか、前年度同コース修了者5名が回のテーマに沿った事例の共有を行い、研修を支えた。

## 4.3.募集・選考方法、4.4.受講者情報、4.5.修了者、修了要件

### ■ 5.4. 募集・選考方法

CINGAホームページに募集要項、スケジュール等を掲載し、TaSSKホームページ上の研修案内からリンクを貼って募集を行った。

### ■ 対象者

本コースは、地域日本語教育コーディネーターがプログラムデザインに関する研修成果を事業実践において発揮することをねらいとして、地方公共団体として日本語教育の体制づくり推進事業を実施する地域から、**地域日本語教育コーディネーター最低1名が日本語教師や総括コーディネーター、行政職員等と3～4名のチーム単位で参加することを条件とした。**

- 「地域日本語教育コーディネーター」は、過去に文化庁「地域日本語教育コーディネーター研修」を修了していること。または、同年度に同研修の「地域日本語教育コーディネーターコース」を受講予定であること。
- 所属地域の地方公共団体が「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を実施または活用しており、その事業において「地域日本語教育コーディネーター」として配置されていること。
- 「生活者としての外国人」を対象とする日本語教育プログラムの編成または実践に携わっていること。または携わる予定であること。
- 日本語教育に関する専門的な教育を受けていること。  
(その他の役割についても、それぞれ参加条件を設定)

## 4.3.募集・選考方法、4.4.受講者情報、4.5.修了者、修了要件

### ■ 受講者情報 参加地域別の役割人数

	栃木県	横浜市	千葉市	東京都台東区
地域日本語教育コーディネーター	1	1	2	1
総括コーディネーター	1		1	
日本語教師				2
国際交流協会職員		2		
行政職員			1	

### ■ 修了者

日本語教育プログラムデザインコース修了者11名（受講者12名）

### ■ 修了要件

- 研修 I, II, III（全30単位）のうち、80%以上の取得。
- 単位は、研修への出席、事前課題への取組、振り返り／レポートの提出により取得する。

## 4.6. 受講者からの評価

### ■研修I ふりかえり分析から見えた成果

#### 【過去年度のコース参加者による事例提供】

前年度に同コースに参加したコーディネーターに研修の一部の回において実践報告と情報提供の協力を得た。特に、県・市・区など、参加地域の行政単位は異なっていたため、同じレベルの事業の事例が参考になったという評価があった。

・協力者（過去年度のコース参加者）による事例報告がありがたかった。もっとじっくり聞けたら尚よかった。

#### 【プログラム構成】

5つの要素（事前課題・講義・意見交換・自己／他者のふりかえり）の組み合わせにより、学びが段階的・重層的に深まったという評価が多かった。

・学びが深まる構成だったのが印象的だった。講義の内容など実際の活動や地域に直接結び付けることができた。

・当初は知識が乏しく、事前課題や講義は受動的になっていたが、回を重ねるごとに考える視点が増えた。

#### 【他地域と合同で学ぶ形式】

・地域ごとの考え方や前提の違いが思っていた以上に大きいことを実感した。

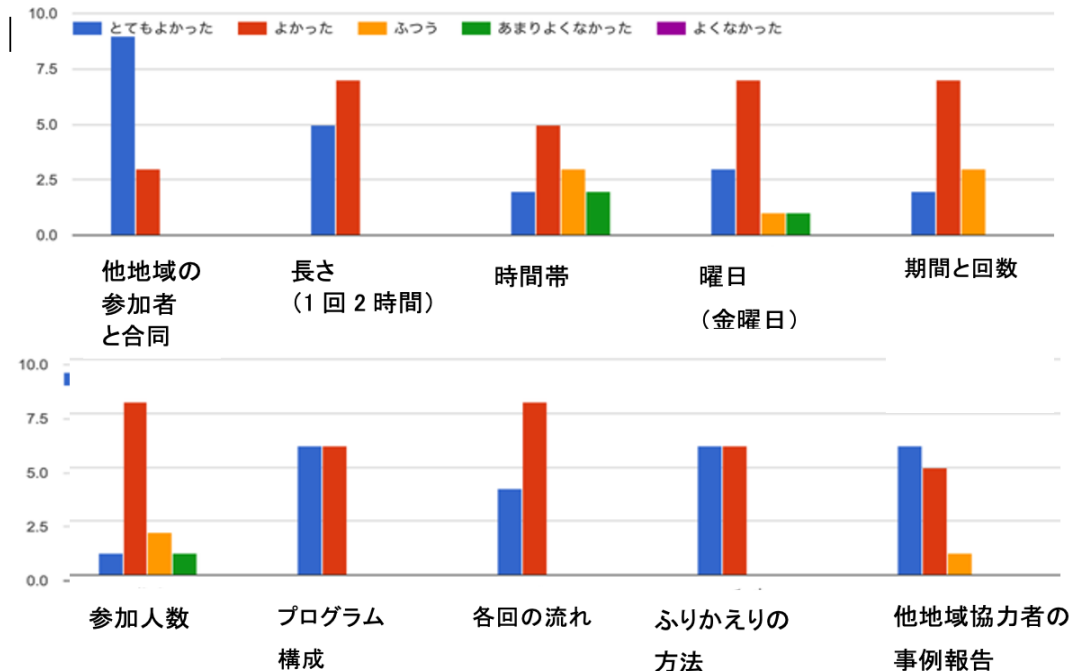
・お互いの意見を出し合い、共に考えていくことの大切さを実感した。

#### 【地域の日本語教育プログラムデザインに資する気づき】

大小さまざまな視点で現場と全体像を行き来できたことへの評価が多かった。

- ・複数の視点を扱っていただいたおかげで、全体像と現場のリアルを行き来できた。
- ・前半は個別テーマのように感じたが、回を重ねることで全体像が見えてきた。

### ■研修I アンケート結果



## 4.6. 受講者からの評価

### ■ 研修II、研修IIIの分析から見えた成果

研修II（モニタリング）によって促進されたこと：

【言語化】 【俯瞰】 【チーム内の対話】 【課題の整理】



研修III ラウンドテーブルでの主な発表テーマ

【体制づくりのビジョンについて】

【体制づくりの現状と課題について】



研修IIIラウンドテーブルの発表、最終ふりかえりから見えた受講者の学び

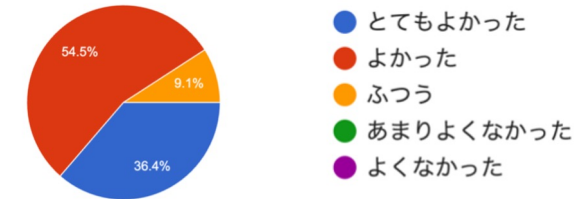
- ・ 「日本語教育の参照枠」言語教育観の3つの柱の理解
- ・ プログラムデザインと目標設定の重要性の理解
- ・ 多様な関係者との対話・関係性構築の重要性の理解
- ・ 地域日本語教育についての理解の深まり



上記の理解にもとづいた意識の変化。  
その学びを実践へ落とし込む行動。

### ■ 最終アンケート結果

研修I、II、IIIの構成について



- ・ 研修Iでインプットした知識を、研修IIのモニタリングで実践・検証し、最終的に研修IIIのラウンドテーブルで他者と共有・言語化するというプロセスが非常に論理的でした。学んだだけで終わらず、現場への定着まで考えられた構成だと感じました。
- ・ 研修1で学んだことを、研修2へ向けて地域で共有できたこと。さらに研修3で他地域の妄想図を見せてもらいながら、話し合えたこと。学びが多かったです。
- ・ 研修Iで基礎知識の習得や自地域について深く考える機会がたくさんあり、研修IIで研修IIIに向けてチーム内でじっくりと話し、さらに考えを深めることができました。研修IIIの後も、これからに向けて研修全体で学んだことを活かしながらこれからの繋げていくために更にチームで考えていきたいと思っています。

### 研修構成に関する課題

- ・ 受講者間・地域別での意見交換の時間の不足
- ・ 協力者の事例報告の時間の不足

→受講者にとって負担感の少ない時間的設定と内容充実のバランスをとることが課題である。参加者の声を取り入れた部分的な改善が望まれる。

## 5. 成果 ■ 5.1. 各コースの成果

### ○地域日本語教育コーディネーターコース（地域Co.）

研修を通して地域日本語教育に関する知識を得、受講者や演習講師とが協働で省察を行い、実践し、また省察を重ねるといった循環型の学びを設計した。受講者は全国各地で多様な実践を行う仲間を得るとともに、広い視野で自己の実践を振り返ることができた。演習講師が受講者と丁寧に対話し、伴走することで、結果として多文化共生社会の基盤形成に資する実践活動の姿を示すこととなった。修了者が各実践地域に学びを還元し、社会的な動きを生み出していくことが期待される。

### ○地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のためのコーディネーターコース（総括Co.）

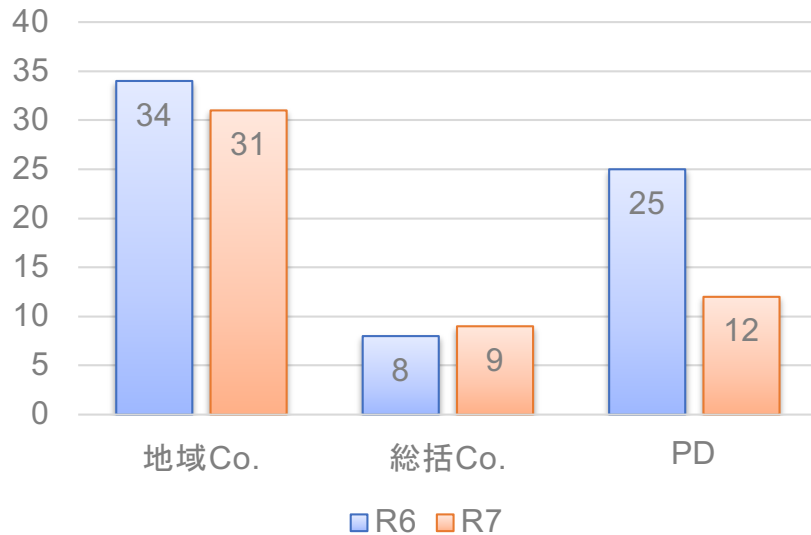
総括コーディネーターに求められる役割や実践の視点の共有、またネットワーク構築において一定の成果が得られている。地域日本語教育の体制づくりにおいて総括コーディネーターには地域の状況や課題、取組みを俯瞰的・客観的に見る視点が求められるが、本研修はそのようなコーディネーター専門性形成に寄与していると言える。

### ○プログラムデザインコース（PD）

地域日本語教育コーディネーターが自他地域の参加者との対話・協働をとおして、日本語教育プログラムを策定するために必要な知識を得るとともに、地域日本語教育を「共生社会構築のデザイン」として再定義するための視点を得た。また、自地域の協働者とともに日本語教育事業の取組を省察することにより養われたチーム性は、地域日本語教育コーディネーターの能力発揮のための環境づくりに寄与した。

## 5.2.受講者数及び修了者数の向上に対する取組

### ■ 受講者数の前年度比、修了者数



・研修全体（地域Co. / 総括Co. / PD / フォローアップ研修）としては、R6年度受講者は187名、R7年度受講者は110名。

・フォローアップ研修はR6年度受講者120名、R7年度受講者58名。

・途中辞退者は各コース毎年0～3名。辞退事由は健康上の理由、退職に伴うものなど、自己都合によるもの。

### ■ 目標値（100名以上）を達成するための取組：

- ・「地域日本語教育コーディネーター・クロスオーバーML」（2021年度以降の本研修修了者が任意で参加するメーリングリスト）やTaSSK webページでの広報、事務局から関係者へ直接呼びかけを行なった。
- ・文部科学省総合教育政策局日本語教育課から自治体等への案内メールをご送付いただいた。

※ 地域日本語教育コーディネーターは専門職であり、母数が少ない。また、その育成を考えると、画一的な学習プログラムでは研修の質が担保できず、目標値達成は非常に難しい。

## 6. 課題

### ○地域日本語教育コーディネーター（地域Co.）

本研修の受託は5年目となるが、年々日本語教師歴、または地域日本語教育に関する実務経験の浅い受講者が増える傾向にある。全国各地で地域日本語教育の推進者が求められており、今後もこの傾向は続くと思われる。本研修では受講者同士の学び合いを軸としてきたが、実践経験の少ない受講者にとって、多文化共生社会形成における実践の位置づけやコーディネーションといった広い視座で実践・省察を行うことは難しい。次年度以降は基礎的な学びや段階的に学びを深化させるプログラム開発を模索する必要がある。

### ○地域日本語教育の総合的な体制づくり推進のためのコーディネーターコース（総括Co.）

総括コーディネーターには、地域日本語教育だけではなく、他の多文化共生政策との連携などより広い視点から地域日本語教育施策を見る視点が求められる。多文化共生施策や日本語教育施策の体系化が進められる中で、コーディネーターの役割や視点もともすれば固定化される傾向が見られるが、協働で実践を省察することを通じて、俯瞰的・客観的な視点を持つことがこれまで以上に求められることから、本研修を継続していくことが重要である。

### ○プログラムデザインコース（PD）

参加地域は県、市、区という異なるレベルの4地域であった。異なるレベルの状況を知るのも参考となるが、一方で同じレベルの地域の参加が複数あることも望まれる。可能な限り、複数の役割の人に地域日本語教育コーディネーターの資質能力が理解・共有されるよう、チーム参加が望ましいが、日本語教師やコーディネーター人材が見つからないという地方も多い中、参加促進の方法が課題となる。

## 7. 評価と展望

**全体評価：**研修を受託し5年目を迎え転換期を迎えています。経験の浅い受講者が急増しており、個々人に応じた学びの質の保証が課題となりました。そのため、今後は教育設計に基づく段階的なプログラム開発が必要であると考えています。Coの専門性や役割の全体像を示したうえで、オンデマンドで基礎知識を固めつつ、演習で省察を深める設計を目指します。総括Coには他分野連携を通じた俯瞰的視点、また、PDコースでは、行政レベルが異なる地域間の相互理解に加え、実務共有のため同一レベルの複数参加も望まれます。一方で、地方の人材確保が大きな障壁となっています。そのため総括CoとPDコースの実施時期の検討を行い協働の学びが保てるよう努めていきます。

### 評価委員からのコメント（抜粋）

○伊東祐郎委員：（研修の進め方における）段階的構造は、単発的研修にとどまらない力量形成モデルとして高く評価できる。また、演習講師による伴走型支援と小グループでの協働省察は、受講者が孤立せず自らの立場を相対化し、構造的課題として捉え直す機会を生み出していた。（発展的課題の一つとして）受講者の立場や経験年数の差異により、行政施策理解を重視する層と、現場実践の具体的なノウハウを求める層との間で学習ニーズの幅があることである。今後は事前課題や到達目標の層別化、選択制ディスカッションの導入などにより、基礎共有と応用深化の二層構造を明確化すると、より効果的な学習設計が可能になるだろう。

○加藤理絵委員：本事業はこれまでの受講者の声や評価委員を交えた内部での丁寧な振り返りを活かし、オンデマンド、オンライン、合同（対面）方式に座学と実践、モニタリング、対話を組み合わせ長い研修期間をすべての受講者が無理なく主体的に完遂できるよう配慮されている。そしてその内容や手法も年々、ブラッシュアップされていると感じる。（中略）日本語学習者の増加とニーズの多様化が進むなか、地域日本語教育が「学習者が夢を語り、自己実現できること」をめざすならば、推進者たちは学習者個人を「知る」こと、そして彼らの生活基盤が安定し「夢を抱ける」日本社会であるために必要な施策は何かを日本語教育の現場から発信する役割も期待したい。

○野山広委員：地域の日本語教室の役割・機能としては、その教室の内外で日本語を学び、日本語で交流することはもちろんですが、その場を言語生活の拠点として、さらには、居場所（セキュアベース）として、多様な言語・文化背景の人々の要望や思いにできるだけ応え、対話やコミュニケーションの潤滑油、水先案内役として貢献していくことが、今後はますます期待されます。こうした役割・機能を果たすため、地域の状況に応じたコーディネーターやコースデザイン（シラバス、カリキュラム含む）ができる人材を育成し、その人材のエンパワーメントに繋がるようなネットワークの拡充、連携・協働に向けて有用な研修を実践、継続してゆくことが今後も肝要かと思えます。

○松尾慎委員：本年度の研修は、各コースが連携し、地域日本語教育の現場に即した実践的な学びの場を提供した。地域Coコースの「実践活動計画」の前倒しによる早期の実践還元や、総括Coコースでの「ビジョンとアクションのつながり」の重視、さらにPDコースにおいて現場の制約による「受講者自身の苦しさ」を乗り越え、「知識や経験値の差を乗り越えるための土台」を築いたプロセスは、いずれも高く評価できる。特筆すべきは、本事業を通じて蓄積された膨大な省察データや実践の記録である。これらは単なる研修の記録に留まらず、地域日本語教育の現在地と未来への道筋を示す、まさに「財産」であり「宝の山」である。メーリングリストに登録する約300名の修了生が各地で積み上げてきた「実践知」を、個々の活動に閉じさせることなく、実効性のある公的なネットワークとして構築・維持していくことが強く求められる。

○山田泉委員：（研修の）見学で感じたことは、座学等で学んだことを、日常での活動で実践しながら考察し、必要な変更、調整をしつつ実践を続け、その結果を疑問や課題と捉えていることも含め被研修者間で報告し議論するという形式でした。（中略）機構の担当者や講師がコーディネーターとして研修を企画、調整しつつ、被研修者の学びの場を運営していると感じました。（中略）オンライン研修が多かったと思いますが、対面での研修で作った同じコーディネーター仲間としての人間関係があることで、研修が表面的にならず、ともに学ぶというコンセプトが活かされたと思えます。

○山野上隆史委員：（研修の形はできてきているので）次は、実際の社会状況の変化や受講者層の変化など、動きに合わせて、うまく開発した研修の枠を使いながら、さらなる社会的な動きを生み出すことに力を注ぐ段階に来ているのかなと思います。国、都道府県、市区町村、国際交流協会、日本語教育機関、大学、事業者、そして市民。多様な機関・団体をどう関係者や担い手にしていくか、そのアレンジの仕方を社会状況に応じて変えながら、変化が多く、不確実性の時代の中で多文化共生社会のマインドセットを生み出していく研修になる。そんな柔軟性と可能性を持った枠と内容なのではないでしょうか。今後、これからの社会状況の中で、プログラムの熟成からさらなる発展へと進化を遂げていくことを期待しています。